

C. S. ルイスが『天国と地獄の離婚』で 描いた新たな煉獄

岡田 理香
OKADA, Rika

目次

序

1. 『天国と地獄の離婚』から
 1. 1. 物語の概要
 2. 「灰色の街」という名のルイスの「煉獄」
 2. 1. 「灰色の街」はどちらにもなる——選択
 2. 2. 何を選択——自我を捨てる
 2. 3. 自我を捨てる選択とは

おわりに

序

C. S. ルイス（Clive Staples Lewis, 1898–1963）は『ナルニア国物語（*The Chronicles of Narnia*）』（1950–1956）やキリスト教護教書などから、「福音的である」と捉えられる傾向がある⁽¹⁾。だが実際のルイスは、ローマ・カトリックに対して否定的でありつつ、「煉獄」には肯定的な記述を残しており、単に「福音的」という一語だけで表現されつくせないものがある。ルイスはアングリカンの信徒だったが、「煉獄を信じる」といった記述が晩年の作品や書簡に見られる。さらに『天国と地獄の離婚（*The Great Divorce*）』（1946）は「煉獄」とする街の説明を含む物語となっている⁽³⁾。本稿ではルイスの『天国と地獄の離婚』を取り上げ、ルイスの描いた「煉獄」がどのようなもので、そこにルイスは何を描出しようとし

たのか読み解くことを目的とする。

まず、煉獄の意味を確認するため『オックスフォードキリスト教会事典』を紐解くと、煉獄はローマ・カトリックの教えであり人が死後、罪を清めるために留まる場所とされ、「罰と浄化の場所」⁽⁴⁾とある。そしてル・ゴッフによると、「煉獄」という言葉自体は12世紀に現れ、ダンテの「煉獄篇」で頂点に達し、現代でもよく目にする絵画などが出現してそのイメージが定着した。その一方で、アングリカンの宗教条項「三十九箇条」は煉獄を否定し、「勝手な盲信」「神の言葉に反するもの」とあり、煉獄の存在を認めていない⁽⁶⁾。しかしルイスの描く「煉獄」は、ローマ・カトリックのいう煉獄や、従来イメージされてきたものとは異なるようである。例えば『マルコムへの手紙 (Letters to Malcolm: Prayer)』(1964)においてルイスは従来の煉獄のイメージを否定的している。ルイスは16世紀に描かれた煉獄が、懲罰と苦痛の場所として描かれたことを批判し、「煉獄の地位が下がっている」⁽⁷⁾と述べる。また、「神の前に出たらず浄められたい」⁽⁸⁾との立場から煉獄を必要とみたルイスは、浄化されて神へ向かう幸福な場所として煉獄を表現している。ルイスは独自の「煉獄」をイメージしていたと考えられるが、『天国と地獄の離婚』では従来と全く別の「灰色の街」という「煉獄」を描いた。

この作品は、ルイスが構想を得てから完成まで約10年がかかっている⁽⁹⁾。これほど時間を要したのは、竹野一雄によると、ローマ・カトリックの教えである煉獄を、プロテスタントの立場から語るという課題に対して「神学的解決を見出せなかった」⁽¹⁰⁾からであるという。またチャド・ウォルシュは、この神学的問題への解決方法が「灰色の街を地獄にも煉獄にもするというもの」⁽¹¹⁾であると述べている。

これまでの研究では、ルイスが「灰色の街」を「煉獄にも地獄にもなる」と描いたことと、それが「天国か地獄を選択するもの」と言われていることを中心課題に据えてきた。だが、この選択がいかなるものであり、ルイスの「煉獄」の特異性をどう表しているのかについて問うことはあまりされてきていない。

これらの文脈を踏まえて、本稿ではルイスの描いた「煉獄」と呼ばれる「灰色の街」を瞥見し、「灰色の街」とは何を意味するのかについて考察する。そこで、2章1節では、「灰色の街」からどちらに行くかが各自の意志によって決まることから、ルイスは人の救いが個人の選択によってなされるとみなしたか否かを検討したい。2章2節では、その選択とは、天国か地獄かよりも、自我を捨てるか捨てないかを選ぶことであるとの仮説を検証する。2章3節では、自我を捨てることは神の意志を選ぶことなのかを考える。そして最後に、ルイスの「灰色の街」は、現代の我々の自我を示しているものなのではないかということについても言及することになるだろう。

1. 『天国と地獄の離婚』から

はじめに物語の概要を確認し、ルイスの「灰色の街」の描出と、選択が描かれていることに着目する。

1.1. 物語の概要

『天国と地獄の離婚』は、主人公「ルイス」がバスで「灰色の街」を出て、天国への旅行に出るところから始まる。「ルイス」は他のゴーストたちと共にバスで天国に到着し、天国の住民と「灰色の街」から来たゴーストたちとの会話や様子を見聞きする。やがて主人公「ルイス」は「ジョージ・マクドナルド⁽¹²⁾」と出会い、天国や「灰色の街」の説明を受け始め、最後は夢から覚めて終わるという物語である。⁽¹³⁾以下では実際に物語に立ち入って考察を進める。

2. 「灰色の街」という名のルイスの「煉獄」

2.1. 「灰色の街」はどちらにもなる——選択

「灰色の街」の説明を読む限りでは、一見この世の街の様子と変わらない。作中ではゴーストの一人が、「地獄と呼ばれる街」には火が燃えていたり悪魔がいたり、ヘンリー八世が火あぶりになっていたり、そういう

ものが見られると思って来たのに、「他の街と少しも変わらない」と期待外れな様子で語っている。ただ「灰色の街」の人々は感情の起伏が激しく、すぐに隣人と喧嘩しては引っ越すということを繰り返している。

「灰色の街」について「マクドナルド」は、「もし彼らが灰色の街を去るなら、そこは地獄ではなかったのだ。そこを去る者にとっては煉獄だったのだ⁽¹⁴⁾」と説明する。要するに「灰色の街」を去るかどうかは本人の意志に委ねられており、それによってそこが「煉獄」か「地獄」かが決まるのである。これが先述のウォルシュのいう、プロテスタントの立場からローマ・カトリックの教えを語ることに對する問題の解決である。プロテスタントの「天国か地獄の二つしか存在しない」という考えと、ローマ・カトリックの「天国と煉獄と地獄が存在する」という考えのいずれにも当てはまらないものである。

この場面は、ウォルシュの言う「問題の解決」ということだけでなく、「個人の選択」も描出された箇所といえるだろう。このことについては、本多峰子も着目しており、ルイスのこれらの描出から「ルイスは天国か地獄かの選択の重要性を強調している⁽¹⁵⁾」と主張する。また P. H. ブレーザーも、「ルイスの作品の中では登場人物たちが選択によって救済される⁽¹⁶⁾」と言及している。

ただここで選択の問題を困難にさせているのは、それが「死後の世界における天国か地獄かを選択する決断⁽¹⁷⁾」と考えられがちなことである。確かにある意味では「天国か地獄」の選択であろう。というのは主人公「ルイス」が「マクドナルド」に「死後の選択というものが本当にあるのでしょうか⁽¹⁸⁾」と質問する件があるからである。「マクドナルド」はそれに対し、「君の為すべきことは、選択そのものの性格を知ることだ。見ての通り、ゴーストたちは今それぞれ選択を行なっている⁽¹⁹⁾」と答えている。

物語には 17 人のゴーストが戻るか留まるかの選択が描かれているが、これは文字通り天国か地獄の選択なのだろうか⁽²⁰⁾。これまでの研究では、この作品で提示されていることが、天国へ行くことへの選択であり、それが救済されることとつなげられて考えられてきた。「救済が選択による」

とルイスが提示しているという想定のもとで、ジョゼフ・ピアースはその救済方法を批判している。「罪を告解し秘蹟を受けるべき人間」が秘蹟を受けることなく、自由意志と選択によって救済に至ると描かれているとピアースは見なしている。そして「ルイスが本当にこう考えるのならあらゆる面から見て異端である⁽²¹⁾」と指摘する。ルイスの描出では選択だけで救済に至るため、そこに問題があるとピアースは批判した。

言い換えると、選択によって救済されるというルイスの提示は、ローマ・カトリックから見れば秘蹟によらない救済を主張したゆえに異端とされる。また、アングリカンから見れば「煉獄」を具体化しているという点において、宗教条項から外れることになる。

しかし、ルイスがこの作品で提示しようとしていたものは、ピアースが批判した点やアングリカンが煉獄を否定しているという問題だけでは、おさまらないようである。ルイスのいう選択は、別のものと考えられ得るのではないか。

2.2. 選択——自我の放棄

では、ルイスのいう選択とは何か。単純に天国か地獄かどちらにするかと言われたら、たいていの人が天国を選択するだろう。ところが物語のゴーストたちは、大半がもとの「灰色の街」に戻る。これらは自分の意志を優先させて自分の思うまま自由に生きられるために、もとの街に戻って行くものとして描かれる。このことからルイスのいう選択とは、天国を選ぶか地獄を選ぶかよりむしろ「自我を捨てるか自我を選ぶか」ということなのではないだろうか。尚、ルイスは『キリスト教の精髓』などでもこれについて論じているが、本稿での「自我」は「エゴ」を意味し、自己中心という意味を含むものとして使用する。では「灰色の街」に戻る人の例を見てみよう。

「灰色の街」から天国に旅行に来た「聖職者」は、天国にいる友人に迎えられて対話する。この「聖職者」は棄教したために「灰色の街」に住んでいると説明されるが、彼はそこで自分が役に立っていると思ひ込ん

でいる。そして「灰色の街」でのキリスト教神学会に参加している。天国の友人が「聖職者」を天国に留まるように誘うと、それに対してこう反論する。

君と一緒に行くなんてできない。私は金曜日には戻って論文を発表しなければならない。下の町には小さな神学会があるのだ。そう、知的生活はなかなか盛んだよ。⁽²²⁾

こう断り、「聖職者」は「灰色の街」へ戻る。この人物を含め、もとの街に戻って行くのは、自分の所有している地位や名誉などに執着心が強く、それらを手放さない人々として描かれる。こういった「灰色の街」に戻る人について竹野は「自己愛あるいは自我執着が産み出す心的状態——自己義認、不信仰、名声への野心、空虚、虚栄心によって、それぞれ天国を拒否し、地獄を選択するのである」⁽²³⁾と述べている。さらにエリサ・マコーマックは、「灰色の街」に戻るゴーストたちを「神よりも自分自身を選んだ状態」⁽²⁴⁾と指摘する。すなわち彼らは自分で決めた通りに生きることができ、他の何者も介入させない「灰色の街」で生きる方を選んでいるのである。これは現世においても、自分のものと思っているものに執着し、それを手放したくないがために神や他の人が介入することを拒む、その結果、神や人との関わりを断ち自己中心的に生きていく人々がいるということをルイスが提示していると見ることができるのではないか。

では自我を手放し、「灰色の街」に戻らなかった例を見てみよう。物語の中盤で、背中にトカゲを乗せたゴーストが登場する。そのトカゲは持ち主の耳元でいつもささやき続けている。彼はトカゲに黙っているようにと怒鳴るが、それでもトカゲは彼の耳元でささやくことを止めず、彼は困って「灰色の街」へ戻ろうとする。そこへ天使が現われて「トカゲを静かにさせてあげましょう。トカゲを殺してあげましょう」と申し出る。持ち主は、最初は躊躇して嫌がっていたものの、天使の説得とトカ

ゲのしつこいささやきに耐えかねてついにトカゲを殺すようにと吐き捨てる。天使は言われた通りにトカゲを殺す。するとそのゴーストは立派な人間へと大きくなって生まれ変わり、トカゲは美しい馬へと変化した。その人物はその馬に乗って、天国の中心地へと駆けて行った。⁽²⁵⁾

これらを見ていた「マクドナルド」は隣にいた「ルイス」に説明する。トカゲは情欲という名の生き物であり、それを殺すことでその人は新しく変えられた、というのである。

それはまず殺されたのだ。[——略——] 何者も、善良な者も高貴な者も、現在あるままの状態では天国に向かうことはできない。同時に何者も、低き者も獣のような者でも自分を死に明け渡すなら、新しく甦る。⁽²⁵⁾

この場面は、「情欲を保持したままでいたいと考える自我」を捨てることを選んだ描出といえる。このトカゲの話について、柳生直行は「重要な真理を含んでいる」と述べ、「永遠の生命にあずかり神の国に入るためには、人は生まれながらの「自我を捨てなければならない」⁽²⁷⁾」としている。柳生によると、ゴーストたちが天国に留まろうとしない理由は「彼らが自我の牢獄に閉じこもり、自己放棄をあえてしようとしない」ことであるという。「己を捨て、自我を十字架にかけなくては、われわれは復活の生命にあずかることが出来ない」⁽²⁸⁾と柳生は主張する。

ここから、ルイスの提示している選択とは、自我を捨てるかどうかに直面した際に、自我を捨てることで新しい生命にあずかることができる、これがルイスの「煉獄」と呼ばれる「灰色の街」での選択といえるのである。

2.3. 自我を捨てる選択とは

前節まででルイスのいう選択とは、「自我を捨てること」であることを見てきた。では結局「灰色の街」とは、何だったのか。その街がこの世

と変わらないという様子から、実はこの世を表しているのかという問いが生じる。すなわちそれは、ルイスはこの世での選択の重要性をこの書で提示しているのではないかという問いである。これについて、この書の序文にこう書かれている。

我々の住む世界というものは、全ての道が数マイル行くと二つに分かれ、その道がまたそれぞれ二つに分かれる、そして分かれ道に出会う度に、我々は決断しなければならない、そのような世界である。⁽²⁹⁾

ここには、この世での二つのうちどちらかを選ぶ人生の決断についての言及を見ることができる。この世に関する言及がこの書の冒頭に置かれているということから、ルイスがこの書で提示しようとしているものが「我々の住んでいる世界での二者択一の決断」と理解できるのではない。ルイスはさらに序文でこう述べる。

この世をどう考えるのか。[——略——]天国を選ばずにこの世を選ぶなら、この世は地獄の一地域であったことを人は知るだろう。逆に、もしこの世を天国の下位におくならば、それは最初から天国そのものの一部であったと知るだろう。⁽³⁰⁾

ルイスがここで言及している「この世」とは、「灰色の街」と非常に類似した性質である。つまり「マクドナルド」のセリフにあった「灰色の街を去るなら、そこは地獄ではなかったのだ。そこを去る者にとっては煉獄だったのだ」⁽³¹⁾という説明に準じてこの序文を読むなら、この世に執着して生きようとするならこの世は地獄であり、この世を去ろうとするならそこは煉獄すなわち天国への道のりの一部ということになる。

「灰色の街」の人々が迫られていた選択とは、自我を捨てて生きるかどうかであったが、それは今を生きる我々の直面している問題なのではないか。これについてマコーマックも、『『天国と地獄の離婚』に描かれて

いるのは、人が生きている間での選択である⁽³²⁾」と述べている。再びルイスの書く序文を見ると、このようにある。

地獄を（あるいは、この世をさえ）手放そうとしない限り、我々は天国を見ることにはならない。天国を受け入れるとすれば、地獄のどんなに小さな、どんなに愛着のある記念品であろうと、それを持ったまま⁽³³⁾でいることはできないのである。

ルイスがここで「地獄を（あるいは、この世を）」手放す、と述べていることはこれまでに見てきた自我を捨てる生き方といえよう。つまり、既述の通り竹野の指摘した「自己義認、不信仰……⁽³⁴⁾」（本稿2.2.）などを放棄して神に従うことを含む。ここで言及されているような、自分の欲から生じた行為を取捨することについて、ルイスは物語中の「マクドナルド」のセリフにこう書いている。

結局、人間には二つの種類があるだけだ。神に向かって「神の御心をなさせたまえ」と言う人々と、神からついには「お前のしたいことをせよ」と言われる人々である。地獄にいる人たちは全て地獄を選んだのだ⁽³⁵⁾。

この「マクドナルド」のセリフを見ると、自我に執着した者は自我の導くままに生き、自我を手放して神に委ねた者は神の導くままに生きるということになる。自我を捨てるかどうか、神のうちに生きるかどうかを決める。これがこの書でルイスの主張したい中心的なことといえるだろう。

さらにいえば、「灰色の街」とは実は「自我」という名の自分の街であり、そこから出るかどうかの選択は、神と関わって生きていくかどうかの選択なのではないか。つまりルイスの描いた「灰色の街」は我々の内側でもある。そこは自分のしたいことを欲のままに行って生きるか、あ

るいは何が正しいことか考えつつ悪と思えるものは捨てて神に従って生きるかを選ぶ場である。ルイスは『天国と地獄の離婚』で、この選択を提示しているのである。

ルイスの「灰色の街」は、新しい「煉獄」の提示である。日々の決断が後の生き方に関わってくるとのルイスの教訓も含まれているといえよう。⁽³⁶⁾ルイスの独自の「煉獄」は、この書が書かれてから時を経てもなお読者の日々の生き方に訴える、現代における選択を提示したものなのである。

3. おわりに

今回の研究では、ルイスの『天国と地獄の離婚』を取り上げ、ルイスの描く「煉獄」に着目した。「灰色の街」が「煉獄にも地獄にもなる」との見方は、彼は救いを個人の選択によるとみなしていることを示唆する。さらに彼のいう選択というのは、自我を選ぶか捨てるかという選択であることが証明された。検討の結果、自我を捨ててこそ神の心に従う者へと変えられることは、現代の我々にも通じるものであることが明らかになった。

また、「灰色の街」とは結局、我々の「自我」という名の街であり、我々の日常の生き方にも訴えるものであると考えられる。

今回は「灰色の街」を手掛かりに、ルイス独自の「煉獄」での選択について考察してきたが、ルイスの「煉獄」そのものについての記述を別の作品や書簡から追うことは課題として残される。この問題に取り組むために別稿を構えたい。

注

- (1) 他にも、ルイスが『キリスト教の精髓』執筆の際にアングリカン、ローマ・カトリック、メソジスト、長老派の各派に原稿を送って意見を求めたという件から、ルイスは教派で一致した見解を提示できるキリスト教護教書を執筆したという印象を与える形で論じられることが多い。
Kilby, Clyde, S. *The Christian World of C. S. Lewis*, Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1964, pp. 159, 171.
竹野一雄『C. S. ルイスの世界——永遠の知恵と美』彩流社、1999年、56頁。
- (2) 『天路逆程 (*The Pilgrim's Regress*)』(1933)を出版した後に「この著者はローマ・カトリックの人物であろう」と何人かの書評者や読者が推測し、ルイスはそれを受け入れがたいものとして後日自分はローマ・カトリック信徒ではないと公言することになった。また『天路逆程』がローマ・カトリックの出版社シード・アンド・ウォード社から新版の出版依頼があった際に、ルイスは「教皇出版社(Papist publisher)から出版されるのは好まない」と当初は述べていた(Hooper, Walter, C. S. Lewis: *A Companion & Guide*, London: HarperCollins, 2005, p. 185. Lewis, C. S., *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 2, ed. Walter Hooper, New York: HarperCollins, 2004, p. 170)。
- (3) 1944年11月10日から1945年4月13日にかけて *The Guardian* 誌(現在も発行中の新聞 *The Guardian* とは別のもので現在は廃刊となったキリスト教雑誌)に掲載された。ルイスの1945年5月28日の書簡によるとこの連載をまとめたものがその年の8月に出版される予定だったが出版の遅延のため実際の出版は1946年1月となった。初版にはミスプリントで1945年11月とある。Lewis, C. S., *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 2, p. 698. 1946年1月の書簡。
- (4) “purgatory,” *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, ed. F. L. Cross, Oxford: Oxford University Press, 1997, p. 1349.
- (5) ル・ゴッフ、ジャック『煉獄の誕生』(渡辺香根夫、内田洋訳)法政大学出版局、1988年、6-7、500頁。
- (6) 「第22条『煉獄』煉獄、免罪、聖像や聖遺物への礼拝と崇敬、また諸聖

人の執り成しに関するローマ教会の教理は、虚しく作られた勝手な盲信的なものであって、聖書に根拠をもたないばかりか、むしろ神の言葉に反するものである」(Thomas, W. H. Griffith, *The Principles of Theology: An Introduction to the Thirty-nine Articles*, London: Church Book Room Press, 1951, p. 298)。

- (7) Lewis, C. S., *Letters to Malcolm: Prayer in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, pp. 627–628.
- (8) *Ibid.*, p. 627.
- (9) ルイスが『天国と地獄の離婚』の構想を得たのは「回心した」と公言して約一年半が経過した1933年4月である。ルイスの兄ウォレンは日記に「ジャック(C. S. ルイス)は目新しい宗教作品を書こうとしている。それは、ある教父たちの見解——地獄に堕ちた者どもの刑罰は永遠であるが断続的であるという主張にもとづいたものである。弟は、地獄の住人たちを天国へ一日旅行させるつもりでいる」と書いている(Lewis, W. H., *Brothers and Friends: The Diaries of Major Warren Hamilton Lewis*, New York: Harper & Row, 1982, pp. 102–103)。内容からこの作品が『天国と地獄の離婚』を指していると分かるが、それから出版までに10年以上が経過している。
- (10) 竹野一雄『C. S. ルイス歎きの扉』岩波書店、2012年、162頁。
- (11) Walsh, Chad, *The Literary Legacy of C. S. Lewis*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979, p. 71.
- (12) George MacDonald (1824–1905)。ルイスが17歳の時に読んだ『ファンタステス(Phantastes: A Faerie Romance for Men and Women)』(1858)の著者で、ルイスはこれによって「想像力の洗礼を受けた」としている。『天国と地獄の離婚』と同時期の1946年にルイスはマクドナルドのアンソロジーを編集し出版している(*George MacDonald: An Anthology*, London: Bles, 1946)。
- (13) Lewis, C. S., *Selected Books*, London: HarperCollins, 1999 所収の *The Great Divorce*, pp. 1023–1094 を使用した。以下 GD と表記する。
- (14) *Ibid.*, p. 1059.
- (15) Mineko, Honda, “People from Purgatory: On C. S. Lewis’ *The Great Divorce*,”

- 『二松学舎大学論集』35(1992年)、23頁。
- (16) ブレーザーはルイスの作品全体を念頭に置いているが、この記述では特に『最後の戦い(*The Last Battle*)』(1956)のクライマックスを想定している(Brazier, P. H., “C. S. Lewis on Atonement: A Unified Model and Event, the Drama of Redemption—Understanding and Rationalizing the Tradition,” *The Heythrop Journal* 56/2 (2015), p. 303)。
- (17) 先述の本多に加え、以下でも同様である。Knowles, Sebastian D. G., *A Purgatorial Flame: Seven British Writers in the Second World War*, Bristol: Bristol, 1990, pp. 141–145. 竹野一雄『C. S. ルイス 歎きの扉』岩波書店、2012年、161–164頁。
- (18) *GD*, p. 1060.
- (19) *Ibid.*
- (20) この作品と同時期に執筆していた『キリスト教の精髓(*Mere Christianity*)』(1952)でも、ルイスは選択について述べている。ただそれはキリストを信じるかどうかの選択である。「我々は選択しなければなりません。この人が神の子であるか、あるいは狂人またはもっと悪いものか、どちらかです」と述べている。ここから、ルイスの意味する選択とは、天国に行くことを含め、キリストを神の子と認めるかどうかであり、それを選んだ場合には救済につながるということになる(Lewis, C. S., *Mere Christianity in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, p. 353)。
- (21) Pearce, Joseph, C. S. *Lewis and the Catholic Church*, San Francisco: Ignatius, 2003, pp. 108–109.
- (22) *GD*, p. 1047.
- (23) 竹野一雄『C. S. ルイスの世界——永遠の知恵と美』彩流社、1999年、134頁。
- (24) McCormack, Elissa, “Inclusivism in the Fiction of C. S. Lewis: The Case of Emeth,” *Logos: A Journal of Catholic Thought and Culture*, 11/4 (2008), pp. 66–67.
- (25) *GD*, pp. 1076–1079.
- (26) *Ibid.*, p. 1079.
- (27) 柳生はさらにルイスの『キリスト教の精髓』(Lewis, C. S., *Mere Christianity*

in *Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, p. 447) を引用している。
「キリストの言っていることは、要するにこういうことだからである——
“わたしにすべてを与えなさい。[——略——] そうすれば、わたしはあ
なたに新しい自我を与えてあげよう。いや、わたし自身を与えよう。わ
たし自身の意志があなたの意志になるように”」(柳生直行『お伽の国の
神学』、新教出版社、1984 年、135-136 頁)。

- (28) 同書、234 頁。
- (29) *GD*, p.1025.
- (30) *Ibid.*, p. 1026.
- (31) *Ibid.*, p. 1059.
- (32) McCormack, *op. cit.*, p. 60.
- (33) *GD*, p. 1025.
- (34) 竹野一雄『C. S. ルイスの世界——永遠の知恵と美』彩流社、1999 年、
134 頁。
- (35) *GD*, p. 1062.
- (36) ルイスは『天国と地獄の離婚』を書く際に、そこに「教訓を含んだ」と
序文で述べ、チャド・ウォルシュはこの書を「教訓的レクチャーで満た
された本」と述べる (*GD*, p. 1026; Walsh, *op. cit.*, p. 76)。

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おかだ・りか)